

日本ルワンダ学生会議

第 18 回本会議 活動報告書



2019年9月3日(火)～9月15日(日)

はじめに

「日本ルワンダ学生会議 第18回本会議 事業報告書」を手にとってくださり、有難うございます。皆様に、今夏の活動を報告できることを大変嬉しく思っております。本書は、2019年9月3日から15日までの間、日本人学生10人がルワンダに渡航し、現地でルワンダ人大学生と協力して行った事業「第18回本会議」の活動内容をまとめたものです。

第18回本会議では、ルワンダ人大学生との交流を深めることに加えて、ルワンダ社会の多様な側面を知ること为目标としていました。一般的な日本人がアフリカやルワンダと聞いて連想するものといえば、内戦、貧困、野生動物が挙げられるでしょう。ケニアのマサイ族のように槍を用いて狩猟を行い、貧しい自給自足の生活を行っているところがほとんどだと思っている人も少なくないかと思います。私たちとて、渡航前に勉強会を重ねて歴史や政治経済状況を学んでいたものの、あまり想像がついていませんでした。しかし、実際に渡航してみて、ルワンダは期待をはるかに上回る奥深さや魅力を持った国だと感じました。北部州や西部州では、大地溝帯の活動により形成されたキブ湖や、マウンテンゴリラの研究センターを視察し、その雄大な自然に触れ、生物多様性と動物保護を学びました。キガリ虐殺記念館や国民和解・統一委員会の訪問では、25年前に起きた凄惨な内戦とその後の平和構築の歩みについて学びました。ジェノサイドの現場で大量の人骨と遺影写真を見たときは想像以上に衝撃を受けましたが、ルワンダ人学生の平和意識の高さには感銘を受けました。

様々な場面で、ルワンダ人の温かさにも触れました。ホームステイの際、私たち日本人メンバーは全員別々の家庭に行くことになり少し心細さも感じていましたが、ホストファミリーは豪勢な家庭料理でもてなしてくれました。同じ釜の飯を食べ、同じ屋根の下で寝て、様々なことを話したことで、ルワンダ人学生とグッと距離が縮まりました。街で出会ったバイクタクシーの運転手さんや、市場の兄ちゃんたちも現地の言葉を色々と教えてくれたり、サービスをしてくれたりして、仲良くなりました。現地に滞在したのはわずか10日余りでしたが、日本でいくら机上の勉強をしても得られない、意義ある経験と学びを得ることが出来ました。インターネットが発達し、世界中のあらゆる人と交流できる現代ですが、やはり面と向かってルワンダ人と交流してこそ、友情が生まれるのだと実感しました。今回の訪問を通じて、団体の活動理念である「相互理解」はさらに深まったと確信しています。

最後となりましたが、本事業は多くの方々のご協力とご支援無くしては実現することができませんでした。皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。本書が、ルワンダへの理解の一助となっただけでしたら幸いです。

2019年10月
日本ルワンダ学生会議 メンバー一同

目次

はじめに	… p. 1
第1章 日本ルワンダ学生会議	… p. 3
代表・副代表挨拶	… p. 4
後援者挨拶	… p. 6
団体概要・沿革	… p. 7
ルワンダ 基本情報	… p. 9
第2章 第18回本会議 事業概要	… p. 11
開催主旨	… p. 12
概要	… p. 12
活動日程・地図	… p. 13
参加者名簿	… p. 15
第3章 各活動報告	… p. 16
18の活動をそれぞれ紹介	… p. 17
第4章 参加者の所感	… p. 26
日本人参加者	… p. 27
ルワンダ人参加者	… p. 29
第5章 協賛・後援	… p. 31
おわりに	… p. 33

第1章 日本ルワンダ学生会議

はじめに
代表・副代表挨拶
後援者挨拶
団体概要・沿革
ルワンダ 基本情報

代表挨拶

まず初めに、日本ルワンダ学生会議 第18回本会議を開催するにあたって、ご支援・ご協力頂いた皆様に、渡航団を代表してお礼申し上げます。特に、平和中島財団様、三菱UFJ国際財団様には多額の活動助成金を給付していただきました。有難うございました。

今回の渡航は「初物尽くし」でした。渡航メンバー全員にとってアフリカ初上陸。従来、東京を中心に活動してきた団体にとって、東京、大阪、広島の3地域の大学から人が集うのも初めて。ルワンダ航空を利用して、インド経由で入国するルートを取ったのも、団体史上初めてでした。そのため、6月上旬にメンバーが確定してから9月に渡航するまでの間、入念に準備を進めました。予防注射やマラリア対策のことから調べ初め、スカイプを通じたオンライン会議で情報交換や相談を重ねました。今振り返ると、心配事の多くは無駄な杞憂でしたが、現地の実態、状況を知らないゆえに必死に情報集めをしました。渡航に対する保護者の理解と同意を得るのに苦労したメンバーもいました。

入念に準備をした甲斐あってか、渡航中は大きなトラブルなく、出会いと学びに恵まれました。11日間で北部州、西部州、南部州など全国各地の様々な都市を巡る、超多忙なスケジュールでしたが、カウンターパートのルワンダ人学生の協力があって、全日乗り切ることが出来ました。首都キガリの主要観光地だけでなく、一般家庭や地方の暮らし、教育現場の様子を視察し、数多くの学生や市井の人たちと交流を深め、ルワンダの多様な側面を知れたと確信しています。

活動報告のページでは、ルワンダ各地で訪問した博物館や大学、研究所のことを掲載しています。ただ単に1つ1つの場所を移動して回っただけでなく、訪問の裏には様々な準備とドラマがありました。そのことも想像しながら、私たちが見たもの、感じたこと、考えたことを読み取っていただければ幸いです。

日本ルワンダ学生会議 代表
山本 峰丸

副代表挨拶

6月初旬に渡航が決まりました。私はそのことを友人や家族に話しましたが、予想通り、ルワンダを知る人はほとんどいませんでした。私自身とてどのような場所なのか、どのような滞在になるのか、全く想像がついていませんでした。ルワンダの学生と分かり合えるのかも不安でした。家族からも心配されて、渡航直前には一抹の怖さを感じていました。今振り返ってみると、この不安や恐怖は「知らない」というところからきていたように思います。人間にとって最も恐ろしいことは無知です。知らない場所に行くことは、暗闇に突き進んでいくようなものです。しかし、一見暗闇のように見えていたルワンダは行ってみると素晴らしい場所でした。日本人とルワンダ人、互いに異なる部分はあるものの、変わらないものを多く持っていました。私たちと同じことに感動し、同じことに笑い、同じように生きていました。

私たちの活動の使命は、日本人がルワンダやアフリカに対して持つ先入観と偏見を取り除き、正しい現状を伝えることです。ルワンダは内戦が激しかった国です。もはや内戦国ではありません。ルワンダ人の大半はスマートフォンも持っており、インスタグラムも使います。クレジットカードを使える店も多くなっています。これが今のルワンダの姿です。科学技術がどんなに発達しても、我々の脳の知識や理解は自ら手動で更新しなければなりません。更新には情報が必要ですが、日本におけるアフリカ関連の情報量は限られています。この報告書を通じて、1人でも多くの日本人にアフリカ観の変化を起こすことができれば良いなと思っています。私たちは所詮学生という立場であり団体も小規模ですが、今後も活動を積み重ね、社会に少しずつ変化を起こしていきます。

今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

日本ルワンダ学生会議 副代表
吉野匠人

後援者挨拶

報告書をご覧の皆様、こんにちは。

日本ルワンダ学生会議（JRYC）を後援しているアフリカ平和再建委員会（ARC）で事務局長をしています小峯茂嗣と申します。2005年に早稲田大学ボランティアセンター客員講師時代に、JRYCの前身である「ルワンダ・プロジェクト」を設立し、それが14年にわたって継続していることをとても嬉しく思っております。

今年9月の第18回本会議は、ルワンダでの開催となりました。今年はジェノサイドから25年の節目の年ではありますが、日本からの参加者はそもそもジェノサイド時には生まれていなかったわけで、そこに25年という時の長さを感じます。ルワンダでも今では人口の6割は内戦後に生まれた世代とのことです。今のルワンダ人からは、「ジェノサイドだけの国ではない」と聞くことが多々あります。世界の人たちにとって「ルワンダ＝ジェノサイド」というイメージが強いからなのでしょう。しかし彼ら彼女らの中には、ジェノサイドを乗り越えて「復興と和解を成しえた」（と、よく言います）ルワンダをもっと知ってほしいと口にする人もいます。そのように、過去を乗り越えて前進する「今」のルワンダを知ってもらおう上で、この報告書はいろいろな視点を提供してくれると思います。

一方で、変貌する都市部と発展から取り残されている農村部との格差は広がっており、強権的な政治体制も変わっていません。そのような中でも、一つの国の中には様々な人がおり、様々な考えを持っているものです。ルワンダについて本や映画で良く知っている人も、「ルワンダ人」については知らない人が多いと思います。その「ルワンダ人」との対話の中で大学生が何を知り、何を考えたかが、この報告書に刻まれています。ぜひ大学生の生の声を感じてもらえればと思います。

アフリカ平和再建委員会（ARC）事務局長
立教大学異文化コミュニケーション学部 助教
小峯茂嗣

団体概要・沿革

- ・日本ルワンダ学生会議（通称：J R Y C、英語表記：Japan-Rwanda Youth Cooperation）
- ・設立：2008年5月
- ・代表：山本峰丸（大阪大学外国語学部2年）
- ・副代表：吉野匠人（早稲田大学社会科学部1年）

・活動理念・目的

私たちの活動理念は「相互理解」を深めることです。普段、日本でルワンダの表面的な政治・経済状況を知ることにはできても、その実情、実態を学ぶことは出来ません。当然、ルワンダ人学生の価値観を想像することも不可能です。そこで、招致・渡航事業で直接対話を行うことにより相互理解を深めつつ、相手国の実情を学ぶことを活動目的としています。「相互理解」とはありきたりな言葉ですが、その欠如により、ルワンダでは隣人が隣人を殺す悲惨なジェノサイドが勃発し、他の国でも差別や偏見に起因する紛争が起きています。私たちの活動は小規模ですが、地道な活動を継続することにより世界平和に貢献します。

・団体の沿革

2005年に早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターが「平和学習」をテーマとしたルワンダ渡航プログラムを主催したのが、学生交流の始まりです。当初は、ボランティアセンターが企画・主催していましたが、2008年からは学生が主体となって学生会議活動の運営を行うようになりました。以来、開催場所を日本・ルワンダと交互に変えながら、今年まで通算18回の本会議を実施してきました。今回は、2020年8月にルワンダ人大学生を招聘し、東京と大阪にて第19回本会議を実施する予定です。

・主な活動内容

①勉強会：月に2回、早稲田大学と大阪大学で行っています。ルワンダに関する文献をゼミ形式で発表したり、アフリカの歴史ドキュメンタリーを鑑賞したりしています。

②本会議（招致事業・渡航事業）の企画準備・実施：本会議では、プレゼン発表やフィールドワーク、文化交流イベント、ホームステイなどを通じて、両国の参加者が互いの社会や文化への理解を深めます。準備過程では、複数の財団法人様や基金様に活動資金の助成を申請します。

③活動報告会や出張授業の実施：本会議の活動報告会に加え、高校や大学での出張授業も随時実施しています。アフリカやルワンダに対する日本の一般学生や市民の理解を促進しています。

④外部の講演会やイベントに参加：外部の機関や団体が開催するアフリカ関連の講演会やイベントに参加、出展し、最新ニュースの把握や他団体との情報共有に努めています。

・過年度の本会議（招致・渡航事業）実施状況

年月	事業	開催地	招致人数	渡航人数
2008年9月	第1回本会議	ルワンダ		8
2009年9月	第2回本会議	ルワンダ		8
2009年12月	第3回本会議	東京、京都、広島、鳥取	5	
2010年8月	第4回本会議	ルワンダ		6
2010年12月	第5回本会議	東京、大阪、名古屋、広島	5	
2011年8月	第6回本会議	ルワンダ		9
2011年12月	第7回本会議	東京、大阪、長崎	5	
2012年8月	第8回本会議	東京、横浜、栃木、岩手	4	
2013年2月	第9回本会議	ルワンダ		4
2013年12月	第10回本会議	東京、横浜、鎌倉、福島	4	
2014年8月	第11回本会議	ルワンダ		5
2015年1月	第12回本会議	東京、京都、佐賀	5	
2015年8月	第13回本会議	東京、大阪、広島、岡山	4	
2016年2月	第14回本会議	ルワンダ		6
2016年8月	第15回本会議	東京、群馬	4	
2017年8月	第16回本会議	ルワンダ		8
2018年8月	第17回本会議	東京	4	
2019年9月	第18回本会議	ルワンダ		10
		合計	40	64

・2019年の活動状況

3月29日	国連開発計画主催「Afri-Converse #9 -Strategies for Maternal and Child Health」参加
4月6日	アフリカ系学生団体の共同イベント「Africarnival in 京大」に出展
4月8日	ルワンダ大使館・国連大学主催「ルワンダジェノサイド25周年追悼式典」参加
6月28日	東京在住ルワンダ人 Berwa Léandre 氏の話聞く会
7月24日	NGO ピースボート主催「ルワンダのいま～被害者と加害者の平和と和解の歩み～」参加
7月29日	アフリカ平和再建委員会(ARC)主催「ルワンダ安全衛生講習会」に出席
9月2日	渡航前合宿を実施（東京都台東区）
9月3日 ～15日	第18回本会議
11月29日	渡航報告会 開催予定
12月1日	日本人アフリカ人ミートアップ in 東京 開催予定

ルワンダ 基本情報



- ・首都：キガリ
- ・人口：約 1,220 万人（2017 年、世界銀行）
- ・面積：2.63 万km²
- ・言語：ルワンダ語、英語、フランス語、スワヒリ語
- ・宗教：キリスト教（主にカトリック）、イスラム教
- ・民族：フツ、ツチ、トゥワ

地理

ルワンダはアフリカ大陸の中央部に位置する内陸国で、南北東西をそれぞれブルンジ、ウガンダ、タンザニア、コンゴ民主共和国と接している。面積は四国の 1.5 倍ほどの小さな国だが、国土のほぼ全域が丘陵地なので、「千の丘の国（Land of a Thousand Hills）」と呼ばれている。また、アフリカ大地溝帯の西リフト・バレーの上に位置しているため、地殻変動によって生じたキブ湖やルジジ川溪谷、ヴィルンガ山地の火山群を有している。

気候は全土が温帯に属している。標高 1500m 程度のキブ湖岸地域の年間平均気温は 22.8℃である。赤道に近いいため春夏秋冬はないが、3 月中旬～5 月中旬に大雨季、5 月中旬～10 月中旬に大乾季、10 月中旬～12 月中旬に小雨季、12 月中旬～3 月中旬に小乾季がある。

略史

年	出来事
15 世紀頃	ルワンダ王国成立
1890 年	ドイツ保護領となる
1922 年	第一次世界大戦の結果、ベルギーの信託統治領となる
1961 年	王政廃止、共和制樹立
1962 年	ベルギーから独立
1973 年	軍事クーデター、ハビヤリマナ少将が大統領就任
1990 年 10 月	ルワンダ内戦勃発（～94 年 7 月）
1994 年 4 月	内戦中に大虐殺（ジェノサイド）発生、約 80 万人が犠牲になる
1994 年 7 月	ルワンダ愛国戦線（RPF）が全土を完全制圧、内戦終結
2000 年 4 月	カガメが大統領に就任（3 度の大統領選挙に勝利し、現在も大統領）
2007 年 7 月	東アフリカ共同体（EAC）に加盟

政治

- ・政体：共和制
- ・元首：ポール・カガメ大統領（H.E. Mr. Paul KAGAME）

・内政

宗主国ベルギーの分割統治により、1962年の独立以前からフツ人とツチ人の間で確執が生じていた。独立後は多数派のフツ人が政権を掌握し、ツチ人を迫害する事件が度々発生するようになった。90年にツチ人主体の反政府軍が反乱を起し内戦が勃発した。特に、94年4月からはツチ人に対する組織的大虐殺が起き、終戦までの3ヶ月間に80～100万人が犠牲となったと言われている。同年7月に内戦が終結し、新政権が発足。出身部族を示す身分証明書の廃止、遺産相続制度改革、国民和解委員会の設置など、国民融和・和解のための努力をこれまで行ってきた。

03年から大統領選挙で3回連続当選しているカガメ大統領は汚職対策や女性の活躍推進に力を入れており、女性が国会議員に占める割合は61.3%となっている。経済政策の点では、農業や産業、教育など各分野で生産性を高めるICT（情報通信技術）を成長戦略の要と位置づけている。ビジネス環境の整備も進めており、世銀が投資環境の良さを格付けした「Doing Business 2019」で、ルワンダは190カ国・地域中29位となった。

・二国関係

現職のカガメ大統領は過去6度訪日している。今年も第7回アフリカ開発会議（TICAD7）の準備と参加のために2度来日し安倍首相と首脳会談を持つなど、関係は非常に良好である。インフラ面での中国資本の投下が著しいルワンダではあるが、カガメ大統領は人材育成を重視する日本の支援も高く評価している。

経済

- ・主要産業：農業（コーヒー、茶など）
- ・GDP：91.37億ドル（2017年、世界銀行）
- ・経済成長率：6.1%（2017年、世界銀行）
- ・状況

25年前の内戦、虐殺からの復興は既に終わっているが、経済規模や産業の成熟度の点では後進国の域を出ていない。政府は内陸国という地理的に不利な条件を埋め合わせるべく、ICT立国をスローガンに掲げており自国産業の育成と外資の取り込みに注力しているが、未だ発展途上。農業と公務員以外の仕事が少なく、大学生などの超エリート層でも卒業後に就職難に直面する現状がある。日本企業は現在26社が進出しているが、個人営業の小規模ビジネスがほとんどで大企業はない。ただ、トヨタ製の中古車は数多く輸入されており、同国の自動車シェアの8割超を日本車が占めていると推定されている。

（以上、外務省ホームページより一部引用、加筆）

第2章 第18回本会議 事業概要

開催主旨

概要

活動日程・地図

参加者名簿

開催主旨

日本ルワンダ学生会議の日本人メンバー10人がルワンダに渡航し、ルワンダ人学生と共に学術・文化交流事業を実施する。学生会議では、日本、ルワンダ双方の学生が自国の社会や文化の様相をプレゼンテーションで発表し合い議論を深める。フィールドワークでは、「内戦の歴史」「自然環境」「一般市民の暮らし」「開発状況と科学技術」の4つのテーマに基づく、博物館や教育機関などの見学を通じて、ルワンダ社会の実態に迫る。両国の参加者が長い日程を共に過ごすことで、友情関係を育み、信頼関係を構築する。

概要

日本語表記名	日本ルワンダ学生会議 第18回本会議
英語表記名	Japan-Rwanda Youth Cooperation The 18th Conference
期間	2019年9月3日(火)～9月15日(日)
(現地滞在)	2019年9月3日(火)～9月13日(金)
場所	ルワンダ共和国 キガリ州キガリ、北部州ギチュンビ、ムサンゼ 西部州ルバブ、南部州ファイエ、ムハンガ
内容	学生会議(プレゼンテーション・ディスカッション) フィールドワーク ホームステイ 文化交流会
参加者人数	日本人学生10名 ルワンダ人学生25名 計35名
参加大学	早稲田大学、青山学院大学、聖路加国際大学、東京外国語大学 大阪大学、神戸大学大学院、広島市立大学 ルワンダ大学
主催団体	日本ルワンダ学生会議(JRYC)

活動日程・地図

第18回本会議（ルワンダ渡航）		
9月3日(火)	日本出国	成田
9月4日(水)	ルワンダ到着 オリエンテーション	キガリ
9月5日(木)	K-Lab・FAB-Lab 学生会議1 日本大使公邸夕食会	
9月6日(金)	NPO「ルワンダの教育を考える会」運営 幼稚園 学生会議2 ホームステイ	北部州ギチュンビ
	9月7日(土)	学生会議3 キセキ日本料理レストラン
9月8日(日)	キガリ虐殺記念館 北部州ムサンゼへ移動	北部州ムサンゼ
9月9日(月)	カリソケ・リサーチセンター(マウンテンゴリラ研究所) ゴイチョ・プラザ(商業施設) インシューティ芸術文化センター 西部州ルバブへ移動	
9月10日(火)	熱水泉 キブ湖 首都キガリに戻る	西部州ルバブ
9月11日(水)	ラジオ・サルース(ラジオ局) プロテスタント人文・社会科学大学	南部州フイエ
9月12日(木)	国民和解・統一委員会	キガリ
	ジップライン社 ムハンガ配送センター	南部州ムハンガ
9月13日(金)	自由行動日	キガリ
9月14日(土)	ルワンダ出発	
9月15日(日)	日本帰国・解散	成田



(Nations Online Project より引用 ;
https://www.nationsonline.org/oneworld/map/rwanda_map2.htm)

参加者名簿

日本側参加者

山本 峰丸	大阪大学 2 年	代表
吉野 匠人	早稲田大学 1 年	副代表
佐々木 美和	広島市立大学 4 年	財務
田島 菜々子	早稲田大学 3 年	企画
渡 千華	青山学院大学 2 年	
岸田 和香	東京外国語大学 4 年	国際渉外
島倉 昌希	聖路加国際大学 1 年	
高階 空也	神戸大学大学院 修士 2 年	国内渉外
住谷 小陽	聖路加国際大学 2 年	
望月 映佑	大阪大学 2 年	

ルワンダ側参加者

Isimbi Honoré	ルワンダ大学	代表
Uwamahoro Gloriose	同上	副代表
Uwiduhaye Joyce	同上	広報
Tuyishime Oreste	同上	
Mugabo Eric	同上	
Niyonzima Emmy	同上	幹部
Umutoniwase Jeanne Gentile	同上	
Byiringiro Consolatrice	同上	
Niyomutabazi Josue	同上	
Mugisha Philemon	同上	メンバー
Igirimbabazi Daniel	同上	
Barahebuza Murengera Lucky	同上	
Nkurunzima Justin	同上	
Muyizere Maxime	同上	
Ngabo Fred	同上	
Uwambajimana Charles	同上	
Mutoni Yvette	同上	
Mugisha Desire	同上	
Uwantege Christelle	同上	
Ntabana Frederic	同上	
Imbutu Cynthua	同上	
Seminega Ange	同上	
Kwizera Bertrand	同上	
Imanishimwe Patrick	同上	
Cyiza Tresor	同上	

第3章 各活動報告

K-Lab・Fab-Lab

在ルワンダ日本大使公邸 夕食会

NPO「ルワンダの教育を考える会」運営 幼稚園

ホームステイ

日本社会についてのプレゼンテーション

宗教についてのプレゼンテーション

学生会議 概括

キセキ日本料理レストラン

キガリ虐殺記念館

カリソケ・リサーチセンター

ゴイチョ・プラザ

インシューティ芸術文化センター

ルバブ 熱水泉

キブ湖

ラジオ・サルース

プロテスタント人文・社会科学大学

国民和解・統一委員会 (NURC)

ジップライン社 ムハンガ配送センター

K-Lab・Fab-Lab

K-Lab & Fab-Lab は JICA が支援するイノベーションセンターです。K-Lab の K は Knowledge (知識)、Fab-Lab の Fab は Fabrication (ものづくり) を表しています。施設には、起業家の活動を支援する交流スペースや、3Dプリンターや大型のレーザーカッターなどの機械がありました。ルワンダ大学の学生など若手エンジニアは全ての資材を無料で利用することができるそうです。

「ICT (情報通信技術) 立国」を国家目標に掲げるルワンダにおいて、JICA の資金援助が若手エンジニアや産業の育成に生かされていることを実感しました。後日訪問したキガリ虐殺記念館には、Fab-Lab で実際に作られたオブジェが飾られていました。



在ルワンダ日本大使公邸 夕食会

在ルワンダ大使宮下様のご厚意より、日本人学生 10 名、ルワンダ人学生 10 名を大使公邸での夕食会にご招待いただきました。大使から二国間関係の歴史と現状について話を伺った後、学生会議からは団体の理念や活動内容についてプレゼンテーションさせていただきました。日本とルワンダを繋ぐ唯一の学生団体として 10 年以上活動を続けてきたことについて高く評価していただき、活動の輪を広げていくよう激励されました。その後、日本料理をいただきながら、宮下大使、飯田書記官、塚越専門職員、嶋田派遣員と歓談しました。今後、私たちがルワンダを含めアフリカの国々に何が出来るのか、人生でどのような関わりを持つことが出来るのか考える良い機会になりました。



NPO「ルワンダの教育を考える会」運営 幼稚園

将来の国や世界を担う子供たちに教育は欠かせないものです。日本では、保育園か幼稚園で就学前教育を受けるのが一般的ですが、ルワンダの就園率は10.1%（2011年）とかなり低いのが現状です。ギチュンビ郡にある田舎の幼稚園を訪問しました。この幼稚園は日本に拠点を置くNPO法人「ルワンダの教育を考える会」が運営しており、ユニセフや国連ルワンダ事務所等も資金援助しています。教室に入ると、子供たちは突然のアジア人出現に驚いた様子ながらも、大きな声で歌を歌って歓迎してくれました。先生は黒板でルワンダ語のアルファベットを熱心に教えたり、絵本を読ませたりしていました。子供たちの笑顔からは明るい未来を感じましたが、このような恵まれた環境の幼稚園に通えている子は少数派であることを忘れてはならないと思いました。



ホームステイ

滞在期間中、1日だけルワンダ人学生の実家に宿泊する機会があり、日本人メンバーは1人ずつ別々の家庭に行きました。ホームステイでは、ルワンダの人々の日常をより身近に感じる事ができたと思います。印象的だったのは、ルワンダの家庭も日本と同様に、家族そろってご飯を食べる習慣があるということです。ステイ当日に予定が立て込んでいたこともあり、家の到着が21時を過ぎてしまいました。晩ご飯が22時頃だったのですが、ルワンダ人学生だけでなく、お父さんお母さんとも一緒に食卓を囲みました。家庭料理ウガリの食べ方を教えてもらったり、日本の生活について話をしたりして、楽しい時間を過ごすことができました。



日本社会についてのプレゼンテーション

山本、高階、岸田は、日本社会全般に関するプレゼンテーションを行いました。まず、山本から地理と歴史の紹介をしました。国土の形クイズは全員正解でしたが、人口の多さ（1.26 億人）や島の多さ（6852 島）については多くが間違えました。「History of Japan」という動画を題材とした日本史紹介では、中国大陸から伝来した文化を選択的受容しつつ、独自の社会制度を築き上げてきたことを説明しました。ルワンダ人に、日本の歴史をどれくらい知っていたかについて尋ねてみると、広島への原爆投下と天皇制が長期間続いていることしか知っていませんでした。

高階は農学研究科に在籍していることから、日本の国土の2/3が森林に覆われていることを紹介しました。農林業の様子や伝統的な木造家屋を撮った写真も活用し、ビジュアルで分かりやすいと好評でした。ルワンダの家屋は日干しレンガを利用したものが大半なので、木造建築は強い関心を呼んでいました。

岸田は日本の自然災害について説明しました。洪水、豪雪、竜巻、雷、地震、津波、土砂崩れ、火山の噴火など、様々な種類があること、そして原発事故の影響や復興状況を図表で紹介しました。ルワンダ人学生の多くは、原発事故による影響が現在まで続いていることを知っていませんでした。立ち入り禁止区域が存在することについても驚いていて、安全性に関する質問が噴出しました。



宗教についてのプレゼンテーション

住谷、島倉は、日本の宗教について発表しました。日本には、八百万の神を崇める土着宗教から形成された神道、中国、朝鮮半島経由で古代に伝わった仏教、ヨーロッパ人宣教師から中世に伝わったキリスト教があることを説明しました。そして、現代の日本人の多くは宗教に熱心ではないものの、3宗教が混在した寛容な宗教観を持っていることを丁寧に紹介しました。12月25日にクリスマスを祝い、大晦日に寺で除夜の鐘を鳴らし、元日に神社で初詣をするという話をすると、敬虔なクリスチャンが多いルワンダ人学生らは、とても驚いていました。



学生会議 概括

3日間の学生会議では、幅広いテーマに関するプレゼンテーションが行われました。日本側からは、地理歴史や自然、宗教を扱った発表に加え、教育制度や大学生活を紹介したもの、日中韓の言語や文化の違いを紹介したものなどがありました。

ルワンダ側からは、民俗や神話の紹介、男女平等の推進活動に関する発表などがありました。最も印象的だったのは、日本とルワンダの平和構築の道のりを比較考察でした。プレゼンテーション後には、国際平和のあり方について討論しました。EUを模範として積極的にアフリカ諸国内の連携や協力を進めるルワンダと、中国、北朝鮮などの隣国と問題を抱え、核兵器禁止条約に参加していない日本では、国際平和へのアプローチは異なります。しかし、それでも、悲惨な内戦、戦争を経験した2カ国の未来を担う大学生として、戦争の悲惨さや民族差別の残酷さを学び、後世に伝えていくことの重要性を共有することができました。



キセキ日本料理レストラン

ルワンダ滞在中、幾度となく日本が恋しくなりました。しかし、キセキ日本料理レストランに行くと、お好み焼きやラーメン、巻き寿司など、様々な日本の味を楽しむことができました。大阪外国語大学卒の方が女将を務めているこのレストランは、人が集い繋がり、キセキ（奇跡）を起こすことを理念にしているようで、日本人向けの宿泊施設も併設しています。ルワンダ在住や旅行中の日本人が多く集っており、交流を楽しみました。外の座席から望む夜景も美しかったです。



キガリ虐殺記念館

ルワンダ内戦の最中、1994年に組織的な大虐殺（ジェノサイド）が発生し、わずか100日間で100万人超が惨殺されました。その負の歴史を後世に語り継ぐため記念館は作られました。年に一度の式典では、国内外から多くの人々が訪れ、犠牲者の追悼が行われます。

館内には、植民地時代から現在に至るまでの歴史が説明されており、犠牲者の所持品や遺骨、遺影写真も展示されていました。学生会議のルワンダ人メンバー全員は内戦後に生まれた世代ですが、中には虐殺によって片親や親戚を失ったという人もいて、これまでの苦しみを想像すると胸が一杯になりました。一方、加害者側は簡易裁判で軽い刑罰が下されたのみで、今は被害者と同じコミュニティで飄々と暮らしているという現状も知りました。復興を果たすための合理的な判断とはいえ、終戦後25年間の歩みは難しいものだっただろうと感じました。ただ、ルワンダ人学生は、皆、民族区別の危険性や平和の重要性を強く訴えていたので、内戦の惨禍が繰り返されることはないだろうと確信しました。



カリソケ・リサーチセンター

リサーチセンターは、絶滅危惧種のマウンテンゴリラを研究するため、1967年に米国人動物学者ダイアン・フォッシーによって建てられました。研究所はカリシンビ山とビソケ山の間に位置しており、2つの山の名前にちなんで名付けられました。

施設内には骨格標本や生態、個体数に関する展示物があり、研究員の方が詳しく説明して下さりました。野生のゴリラは地球上でアフリカ大陸のみに生息しており、そのうちマウンテンゴリラはルワンダ、ウガンダ、コンゴ民主共和国の3ヶ国にまたがる火山国立公園一帯にしかいないそうです。ゴリラは食肉になり得ることから密猟が相次いでいたものの、近年は保護活動のかいあって、推定個体数は700頭程度で落ち着いています。山奥に生息する本物のゴリラに会うことは出来ませんでしたが、ルワンダの自然・動物保護への理解を深められました。



ゴイチョ・プラザ

北部州ムサンゼにある商業施設です。高さは4階建てながら、かなり大きなデパートで様々な売店や銀行が出店していました。日用品や飲食料品だけでなく、民芸品やアフリカ布「キテンゲ」の衣服を売っているお店もありました。伝統衣装はカラフルでとてもお洒落でした。施設を歩いていて中国の面影も強く感じました。外壁には中国のスマホブランド「TECNO」の巨大広告が掲げられ、広い販売スペースも持っていました。アフリカ市場で第1位のシェアを誇り、ナイジェリアやケニアにも研究開発拠点を持つとは聞いていましたが、ルワンダの地方都市でもその強さを実感しました。



インシューティ芸術文化センター

インシューティ (Inshuti) とは、ルワンダ語で友達の意味です。センター内外に様々な絵画や彫刻作品が展示されていました。日本の伝統的絵画は黒、白、紺など色の種類が限られ、濃淡を駆使して表現するものが多いですが、ルワンダの絵画は赤、黄、茶、青などの派手な色を大胆に使い、物をくっきり描く傾向が強いように感じました。センターは一般市民の憩いの場にもなっていて、2m四方の大型ボードゲームを外に置いて遊んでいる人たちもいました。



ルバブ 熱水泉

コンゴ民主共和国との国境に接するルワンダ西部の都市ルバブへ行きました。キブ湖の湖岸の泉では50℃超の熱水が湧出しており、地中の火山活動を感じられました。地元の人による温水マッサージも行われていて、イスラエルなど外国人観光客の姿もちらほら見受けられたことから、観光業がこの街の一産業になっていると感じました。一部の学生会議メンバーは水浴びをして、泉水の熱さと湖水の冷たさの両方を楽しみました。



キブ湖

キブ湖はアフリカ大地溝帯の活動によって形成された火山湖です。海拔は1460mながら、広さは琵琶湖の約4倍となる約2700km²あります。ヴィルンガ山地の火山群に囲まれており風光明媚な景色が楽しめるので、内陸国ルワンダの数少ないリゾート地の1つとなっています。ボートに乗ってコンゴ民主共和国との国境近くまでクルージングに行きました。湖に浮かぶ無人島では、四方見渡してどこも山と湖という美しい風景をバックに写真を撮ることが出来ました。湖底で噴出するメタンガスを採取する施設やヒレナマズの養殖漁場も近くで見ました。湖岸の料理屋で食べた揚げ魚はあまり美味しい印象はなかったものの、湖が地元の水産業や資源開発にも生かされていることを実感しました。

夜間に行った際は、対岸のコンゴ民主共和国の都市ゴマが見えました。エボラ出血熱による死者が出た街で、複数の武装民兵組織が出没する非常に危険な地域と聞いていましたが、夜遅くでも明かりが煌々と輝いており、その繁栄ぶりが窺えました。



ラジオ・サルース

学生会議のメンバーが在籍するルワンダ大学には、非営利のラジオ放送局「ラジオ・サルース」があります。ジャーナリズムに関心を持つ学生が 60 人程集い、毎日朝 6 時から夜遅くまでボランティアで番組を提供しています。放送室に入り、情報收拾から放送までの過程を見せてもらいました。ルワンダ語で喋っていたので何を言っているか分かりませんでしたでしたが、流暢かつ楽しそうに話しているアナウンサーの姿が印象的でした。真偽は不明ですが、DJの人によると国内では2番目に人気のラジオ局で、国民の過半数が愛聴しているそうです。隣国のタンザニアやブルンジまで流れていることにも驚きました。番組はルワンダ大学のウェブサイトからも聞けるらしいので、また後日聞いてみたいと思います。



プロテスタント人文・社会科学大学

プロテスタント人文社会科学大学（通称：PIASS、ピアス）では、まず、東京外国語大学に1年間留学していたロドリグさんに、キャンパスを案内してもらいました。校内を巡り終えた後、一つの教室に入り、ピアスの大学紹介と私たち学生会議の活動についてお互いにプレゼンテーションしました。学生数 1000 人にも満たない小さな大学ながら、アフリカ各国のプロテスタント信者や日本、韓国からの留学生を受け入れているという話に驚かされました。次に3つのグループに分かれて、それぞれ議論、交流する時間が設けられました。私の班では、ピアスの平和紛争学科の学生から、広島原子爆弾投下のことなど、日本の歴史や時事についてたくさん質問を受けました。こちらからはジェノサイドの被害者が加害者を赦し受け入れられる理由や和解のための具体的活動など、今まで疑問に思っていた事を質問することが出来て、とても勉強になりました。



国民和解・統一委員会（NURC）

UNRCの事務所では、ルワンダが辿り乗り越えてきた歴史とその困難について委員長から説明を受けました。委員会の理念や現在計画中のプロジェクトについてもお話を伺うことが出来ましたが、最も印象に残っていることは平和構築のための5条件です。それは平和、真実、正義、告白、そして赦しです。ジェノサイド後に、全国民が加害者と被害者に二分された状況から、この5条件に基づいて、効率的かつ戦略的に和解と国民統合を進めたことに感銘を受けました。



ジップライン社 ムハンガ配送センター

ジップライン社は、米国カリフォルニアを拠点とする医療ベンチャー企業です。ドローンを活用して医薬品や医療用血液を輸送するシステムを開発しています。医薬品管理や無人航空機に制限のある米国から離れ、同社がアフリカで初めての拠点として選んだのがルワンダでした。ルワンダは「千の丘の国」と呼ばれるほど丘陵地が多く、未舗装の道路も多いため、田舎の村に物を輸送するには時間がかかります。そのため、軽微な怪我や失血でも命を落とす人が少なくないという現状があります。ムハンガ配送センターは、全国各地の病院とネットワークで繋がり、要請を受けたら瞬時に必要な物品を空路で輸送します。

大型ドローンが時速100km超の速さで離着陸する様子を間近で見ることが出来て、興奮しました。帰着するドローンはゴムパチンコのショットのような機器で受け止めるのですが、受け止め機器にピンポイントで正確に飛来するには特に驚かされました。強風や濃霧のときの運用や本国での法規制に課題を抱えているジップライン社ですが、活動がアフリカ全土に広まりより多くの命が救われることに期待したいものです。



第4章 参加者の所感

日本人参加者
ルワンダ人参加者

学生会議に参加して

東京外国語大学 4年 岸田和香

ルワンダ渡航に参加した動機は、大学で紛争解決・平和構築学を専攻するきっかけとなった1994年のルワンダ大虐殺の後、「アフリカで最も平和な国」と呼ばれるまでに国内情勢を回復させた平和構築プロセスを、実際に訪れて学びたいという思いがあったからです。しかしルワンダで過ごした2週間の中で、当初の目的であった大虐殺の歴史とその後の取り組みについてのみならず、「ルワンダ」という国やそこに住んでいる人々から多くの“人として大切なこと”を学ぶことが出来たように思います。

滞在中、私が一番感銘を受けたのは、カウンターパートであるルワンダ大学の学生さんたちから受けた「温かい歓迎」です。毎日朝早くから私たちをホテルの前まで迎えに来て、様々な場所へ連れて行ってくれました。移動中も休むことなく次の予定を確認したり、私たちが疲れていないか、終始気を配ってくれていました。「いつも面倒をみてくれてありがとう。本当に感謝しているよ」と伝えると、「お礼なんて言わなくて良いの。これは私たちの責任だから」という返事がどの人からも返ってきました。カウンターパートの学生の中には、翌週に試験があるにも関わらず、早朝から夜遅くまで毎日行動を共にしてくれた人もいました。このような「おもてなしの心」は、しばしば当たり前のものとして、その大切さや尊さが軽視される傾向がありますが、私は彼らの「他人を思いやる心」を目の当たりにし、感動すると同時に、日々の自分の他人に対する姿勢を反省し、見直すことが出来ました。

また、ルワンダ国内の様々な地域を訪れ、地元の方々の暮らしを間近で拝見するうちに、私の中にある「平和」という観念が徐々に変わっていきました。大学の専門科目として、日々「平和とは何か」「平和を達成するには何が必要か」ということについて考えています。その中で、アフリカはしばしば「未発達地」と位置付けられ、国際社会からの開発などの手段を用いた「援助」が必要な地域であると描写されることが多いです。しかし、私はルワンダに滞在し、「平和」という定義は多岐に渡り、アフリカ(ルワンダ)には、いわゆる“先進国”にいる人間が味わうことの出来ない「幸せ」があるのだということを強く感じるとともに、やはり、よく教科書等で叫ばれる「アフリカに対する開発の必要性」は必ずしも現地の方々の幸福には繋がらないのではないかと改めて感じる事が出来ました。これは、世界には多種多様な文化、人、価値観、生活様式があり、その多様性は尊重されるべきであるということです。先進国を中心とした「幸せ」の基準をすべての国に当てはめることは乱暴であり、また、当てはめることは出来ないのだということを再確認出来たように思います。

私には将来、人道支援に関わる仕事に就きたいという夢がありますが、ルワンダで得たこの確信は、私の将来にとってもプラスになることだと思います。大国、先進国が大きな影響力を行使しているこの世界で、自分が暮らす環境とは異なる世界を自分の目で見て、その経験に基づいて考えたという体験はとても貴重なものであり、今後も忘れず大切にしていきたいです。2週間という時間は、ルワンダを理解するにはとても短いものでした。しかし、この学生会議に参加した経験を通して、多くの素晴らしい友人との出会いや、更なる知識・経験を求めて努力を続けるモチベーションを得ることが出来ました。このプログラムに参加させて頂けたことに本当に感謝しています。ありがとうございました。

ルワンダで学んだこと

聖路加国際大学1年 島倉昌希

ルワンダ渡航前と後で、私の中のルワンダという国の印象は大きく変化しました。それは、渡航前に想像していたルワンダのイメージが、実際に渡航したことで、良い意味で裏切られたからです。また、今までの自分にはなかった新たな考えに触れることができたからでもあります。

何よりも衝撃的だったのは、美しく整備された街と治安の良さです。キガリはもちろん、地方の街でもほとんどの幹線道路はきれいに舗装されていました。発展途上国では、舗装されていない、あるいは舗装されていても凸凹で車やバスで走ると大きく揺れると考えていましたが実際はそうではありませんでした。また、治安が非常に安定していることに驚きました。もちろん、治安が安定しているということは渡航前の調査では認識していましたが、実際に滞在していると、その良さが確かであるということを実感しました。夜間に街に出歩いても、危険を感じたり、不安を感じたりすることが全くありませんでした。人が集まるスーパーマーケットや商店が入っている建物では、必ず手荷物検査等のセキュリティーチェックがありました。空港におけるセキュリティーチェックはさらに厳重で、空港の敷地に入る手前で全員の荷物を出して、犬とX線による検査が求められました。

ジェノサイドから25年経過した今のルワンダは、街の雰囲気や治安の良さから、ジェノサイド発生の事実を日常生活において感じることは少なかったです。しかし、その出来事が遠い昔の話ではないという事実を強く感じたことがありました。それは、学生会議のルワンダ側の同年代の学生がジェノサイドで親を失っているという事実を聞いたときです。知識としてのジェノサイドの歴史が、現実の出来事として非常に身近に感じられたような気がしました。また、虐殺記念館を訪問した際にはルワンダ人の学生が、一つ一つの展示を丁寧に説明してくれたことを覚えています。展示のなかには、私たちが滞在していたセントポールホテルでのエピソードもあり、それもまた感慨深く思いました。

このほかにも、ホームステイ先で体験したルワンダの食事や暮らし、言語や国民性など、様々な発見や驚いたことが多くありました。私が強く感じたのは、これらの学びや考え、発見は、ルワンダに実際に滞在したからこそ得られた、ということです。事前学習として、インターネットや書籍等でメンバー各々が学習しました。治安の良さや歴史、言語や現在の経済状況などを知ってもなお、行ってみたいとわからないことが多く存在するということを痛感しました。訪問したピアス大学の学生が話していたことが印象に残っています。「ルワンダをはじめ、自分以外の国のために活動をしたいならば、その国について“知る”ことが大切。本当の意味で“知る”ためには、その場所に来て、そこにいる人と同じように生活して住んでみる必要がある」その言葉の意味を、今回の滞在で少しは理解できたように感じます。10日間という短い期間ではありますが、実際に行くという第一ステップを踏めたことは大きな意味があると感じています。今回の日本側の渡航メンバーの専攻は様々ですが、どの方面からのアプローチであったとしても異国の文化に携わる際には、インターネットや書籍などの情報では理解できないことが多いということを認識することが大切だと思います。

JRYC The 18th CONFERENCE

University of Rwanda, School of Information Communication Technology
Byiringiro Consolatrice

1. EXECUTIVE SUMMARY

JAPAN-RWANDA YOUTH COOPERATION is a student students-led organization, which aims at enhancing mutual understanding between Rwandan and Japanese culture and ways of living. JRYC organize a conference every year that is held in either of the countries respective of the year. In one year, it is held in Rwanda and the next in japan. This year, the 18thConference held place in Rwanda. It was a fantastic experience, we visited different Rwandan touristic sites, we learned more on various economic development Project mostly sponsored by Japanese companies and NGO. As JRYC team, we also shared about the history of our country especially the quick development that was resulted from Unity and Reconciliation among Rwandan after the Genocide against Tutsi in 1994.

2. K-LAB AND FAB-LAB

On the second conference day that I led, we visited K-Lab and Fab-Lab. Fab-Lab stands for Fabrication Lab is a space for members to turn innovative ideas into products specifically in the hardware and electronics domain. When we visited the Lab, We had enough briefing about how they operate and how they get income. Danny BIZIMANA, the Director Manager explained that Fab-Lab Rwanda was established in May 12th, 2016, by ICT Chamber in partnership with Rwanda Development Board (RDB), Japan International Cooperation Agency (JICA), Ministry of Education, SolidWorks Corporation MIT-CBA, and Gasabo3D. They all followed through taking lessons learnt from efforts of supporting Software Innovators (at KLAB) to execute on his Excellency’s recommendation to put in place a Fabrication Laboratory (FABLAB) to support Hardware Innovators in Rwanda. We had a tour in the Lab and were shown machines, used in the fabrication of different hardware. These machines include Fabrication of boards made in wooden, Arduino, plastic materials and other more. “We use this lab for the Community gain not for making profit”, the manager said. We bring together student with innovative ideas, acquire them with resources, network and skills. These helps them transiting from ideation into prototyping. When their prototypes are tested and appreciated by the community, we assist them in developing their business models that can compete on both the local and international market



for their products. Danny Concluded saying that they see being so productive, since we help youth of this generation to find their own solutions and to become Job creators.

By next, we explored K-Lab (knowledge Lab), this is an open technology hub in Kigali where students, fresh graduates, entrepreneurs and innovators come to work on their ideas/projects to turn them into viable business models. In K-lab, we met different young innovators, who were operating their projects and who joined K-Lab when they were at the ideation level. By Concluding, the information, knowledge and experience we gained on this conference day, motivated us and made us think beyond the box on how to use our capability and start being Job creators.

3. Main Conference

In this internal Conference, we had enough time to share more about our cultures, myth and lifestyles. We had more from Japanese culture, geography and Rwanda people shared their geography and Country history.



4. Dinner with Japanese Ambassador in Rwanda

We ended the day with dinner with the Japanese Ambassador; He said he was glad to welcoming Japanese team on the land of Rwanda, that this shows the unity and relationship between Rwandan and Japanese. He also encouraged our initiative of Japan Rwanda Youth Cooperation. “This is a good time to share various differences and learn from them.” The ambassador mentioned. He also shared with us a lot of achievement of Japanese organization and companies that were raised since he reached in Rwanda. We had a nice time together also tried of local Japanese food.



第5章 協賛・後援

協賛（助成）

公益財団法人 平和中島財団 様
公益財団法人 三菱UFJ国際財団 様

後援・ご協力

在ルワンダ日本大使 宮下孝之 様
在ルワンダ日本大使館の皆様
アフリカ平和再建委員会 様
立教大学助教 小峯茂嗣 先生
シニアアドバイザー 阿部理 様

本当にありがとうございました。

おわりに

日本ルワンダ学生会議は、前身のルワンダ・プロジェクトが始まってから14年、学生会議の活動を始めてから11年となります。今年も何とか交流を継続することができ、ひとまず安心していきます。学生団体の活動歴でいうと14年は決して長い方ではありませんが、発展途上国のルワンダにおける14年は長く、劇的な変化が起きてきたのではないかと思います。第一次渡航が実施された頃は、復興途上で治安が不安定、国民和解のプロセスも試行錯誤の最中だったでしょう。参加していたルワンダ人学生らもジェノサイドを目の前で見て経験した世代に該当します。国内総生産GDPの値は、現在の4分の1程度。K-LabやFab-Labのような産業育成センターはなく、農業以外の産業はほぼ育っていない状況でした。

団体を創設した先輩方はそのような国に光を見出し、学生交流を始めました。今でこそ、平和構築の歴史や経済成長が注目されて、現地在住の日本人や旅行会社が実施するスタディツアーは多くあります。しかし、インターネットが未発達で、ルワンダ人と連絡を取り合うことも容易でなかった当時は他にない挑戦でした。活動理念には「相互理解」を掲げました。割とベタで、ありきたりな表現のようにも聞こえます。しかし、創設時の先輩方は、国際協力を志す以前に、相手を知ることの重要性を強く認識していました。地に足をつけた、着実な学生交流を目指していたのです。

日本とルワンダを繋ぐ唯一の学生団体として交流を続け、10年以上経過しました。ルワンダは期待通り、平和構築と経済発展を成功させています。今まさにアフリカで最も注目される国になりつつあります。団体も様々な成果を産み出しました。ルワンダ渡航をきっかけに、アフリカ学や平和構築学に興味を持ち博士号まで取得した人、JICAやJETROのアフリカ課に勤務する人が現れました。ルワンダの側でも、日本の大学院や理系研究所に留学、インターンシに来ている人がいます。ルワンダ大学では、学内で知らない人はいない有名な団体になり、入会に書類、面接審査を要するほど人気になっているそうです。

私たちは、今回の経験を一過性のものとして終わらせるつもりはありません。ルワンダ人学生一人一人と結んだ絆を胸に、今後も引き続き、活動の輪を広げていきます。日本とルワンダの友好関係に貢献できるよう全力で頑張ります。

2019年10月
望月映佑

日本ルワンダ学生会議

第 18 回本会議 活動報告書

2019 年 11 月 8 日 初版発行
発行：日本ルワンダ学生会議
代表 山本 峰丸